

百四十四夜

野村胡堂

一

「親分、退屈だね」

ガラッ八の八五郎は、鼻の穴で天文を観るような恰好ポーズを取りました。

「呆あきれた野郎だ。小半日空を眺めて欠伸あくびをしていりや、猫の子だって退屈になるよ。庭へ降りて来て手伝いな。跣足はだしになると、土が冷やりとして、飛んだいい心持だぜ」

平次はそう言いながら、せつせと植木鉢の世話をしております。青葉と初鰹はつがつおと時鳥ほととぎすで象徴される江戸の五月は、天気さえよければ、全く悪くない心持でした。いきなり飛出して、母なる大地の膚はだに、跣足で触れる快よさは、人間のもつ一番原始的な素朴そぼくな望みだったかも知れません。

だが、八五郎は違います。

「そいつはあんまり粹いきな恰好じゃないぜ、親分」

若い親分平次の、尻を端折った後姿を眺めて、八五郎はニヤリニヤリと笑っているのです。

「粹事いきごとで植木の世話をする奴があるものか。日向ひなたへ寝そべって、お先煙草をひと玉煙にする野郎だって、大した粹じゃあるめえ。煙草は構わねえが、縁側やけあとを焼跡だらけにするのだけは遠慮するがいい。店賃たなちんがキチンキチンと入ってないから、大家へ気の毒でな
らねえ」

「へエ、——親分でも店賃を溜めるんで？　へエ——」

「何を感服仕るんだ。岡っ引が店賃を溜めりゃ、お上から御褒美でも出るって言うのかい」

「へエ、——驚いたね。二三百両持って来てやりてえが、あつしも、今月はやり繰りが付かねえ」

「馬鹿野郎、人の店賃の世話より、手前の小借りでも返す工夫をしやがれ。二三百両ありゃ、角の酒屋の借くらいは返せるだろう」

「ありゃ、一貫六百で、親分」

「六百でも一貫でも借は借だ。十手なんか突っ張らかして半端な借を拵えると、町内の鼻ツつまみになるぞ」

「へエ——」

ガラッ八は、まさに一言もありません。

「まア、そんな事を、人様が聞くと笑いますよ」

女房のお静は濡れた手を拭きながら、顔を出しました。その後ろから、ニコニコした顔を覗かせたのは、石原の利助の娘——娘御用聞——といわれたお品です。お静とあまり年は違いますが、何時まで経っても世帯擦れのしない、初々しいお静の女房振りに比べて、出戻りで理智的で、確り者らしいお品は、美しさに変りはなくとも、二つ三つ老けて見えるのも是非のないことでした。

「あ、お品さんか、——お品さんなら有るも無いも承知だ。極り悪がることがあるものか」

「まア」

お静とお品は、顔を見合せて隔てもなく笑いました。

「ところで父さんは元気かい、近頃すっかり御無沙汰したが」

お品の様子が何となく冴えないのを、平次は見のがす筈ありません。

「ツイこの間も、さんざん親分にお骨折をかけたんですから、今度はお父さんとつが自分で手掛けて目鼻をつけたいって言うんです——」

お品は本当に言い難にくそうです。昔は平次と張り合って、散々いやな事もした父親の利助が中風の気味で引籠ってからは、平次の並々ならぬ助勢でわずかに十手捕縄を守り通して来た事を考えると、この上平次の親切に甘える気もなくなるのでした。

「そいつはつまらねえ遠慮だぜ、お品さん。この二三日はろくな仕事もなく、俺は植木ばかりいじっているし、八の野郎は臍へそから煙の出るほど煙草を吸って、退屈たいくつ様の百万遍だ、——俺と八で間に合うことなら、なんでもそう言って来るがいい、飛んだ人助けだぜ」

平次は手を洗って端折った尻をおろすと、世話甲斐もない植木鉢の行列を、沁々しみじみと眺めやるのです。

「それじゃ、聞いて下さい、親分」

お品は話し始めました。

二

大阪へ送る幕府の御用金五千両、宇津谷峠うつのやとうげに差しかかったところを、三人組の兇賊に襲われ、宰領の武家中根鉄太郎は斬られ、馬子二人まで傷でを負おわされて、五千両見事に奪い取られたことがあります。

それは今から三年も前のこと、当時はまだ元氣の良い石原の利助は、町奉行から特別のお声がかかりで、勘定方の役人と一緒に、

東海道宇津谷峠まで出張し、十日あまりも滞在して調べましたが、何の得るところもなく帰って来たことは、平次もよく記憶しております。

「その三人組の一人、三州の藤太というのが駿府すんぶでお手当になりましたが、激しい捕物で、役人に斬られて間もなく落命。息を引取るとき、宇津谷峠で奪い取った五千両は、仲間の頭分西国浪人赤井市兵衛が隠していると白状したそうです」

「――」

平次はその先を促すうなが様に膝を進めました。お品の持って来た話は、どうやら退屈病を一遍べんに吹飛ばしてしまいそうです。

「もう一人の仲間は稲妻小僧の六。三人別れ別れになってほとぼりをさまし、三年目の今年江戸に落合って、五千両をわけける約束だったそうです。三州の藤太が死に際に白状したのはたったこれだけ」

「それがどうしてお品さんに判ったんだ」

「駿府のお役所から人が来ましたよ。三年前お父さんとつが調べに行ったことが判っているからでしょう」

「話は面白そうだが、たったそれだけじゃ、手のつけ様がねえ」
「まだこんな事がありました。三州の藤太の命より大事にしていた立派な煙草入の中に、鍵が一つと丁寧ていねいに畳たたんだ紙片が一枚入っていて、それにはこう書いてあったんだそうです。『大舟町市兵衛

百四十四夜』――と」

「大舟町？ 市兵衛？ 百四十四夜？」

「煙草入は持って来て、お父さんが預かってありますが、何の事だが、ちっとも判りません」

「――」

「残った二人の悪者が、江戸の何処^{どこ}かで逢って、五千両の御用金を始末するのも近いうちでしょう。駿府からわざわざ知らせてくれた事でもあり、ここで曲者^{くせもの}を縛って、五千両の御用金をお上の手に返せば、お父さんもどんなに顔がよくなることでしょう。――でも」

お品はうら悲しそうでした。三十年も鳴らして来た石原の利助の名も、老衰と病気で近頃はしゃっくりを止める禁呪^{まじない}にもならず、近いうちに十手捕縄をお取上げになるだろうという噂さえ立っているのです。

「お品さん、心配することはないよ。俺で出来るだけのことはやって見よう。手掛りさえありや、手繰^{たぐ}って手繰れないことはあるまい」

と平次の無造作さ。

「親分」

お品は口もきけないほど打たれて居りました。江戸開府以来と言われた、名御用聞銭形平次が引受けてくれさえすれば、土壇場^{どたんば}に据えられた親の利助の名も、どうやら救うことが出来るでしょう。

「その文句を書いて貰おうか、お品さんのいい筆蹟^てで――」
「あら」

お品は少し照れながらも、半切と硯箱^{すずりばこ}を借りて『大舟町市兵衛百四十四夜』と認め^{しめた}、極り悪そうに平次の前に押しやりました。

「八、こいつは判じ物だ。少し考えてくれ」

「へエ――」



©2017 萩 柚月

八五郎はその文句を覗いて、鼻の穴をふくらまして居りますが、結構な知恵などは浮びそうもありません。

「大舟町というのは何処だい」と平次。

「戸塚の裏街道に、大船というところはあるがね」

「そいつは東海道の田圃たんぼの中だ。曲者が集まるのは江戸の真ん中だぜ」

「お膝元には大舟も小舟もねえ——」

「待ちな、八、洒落しゃれが素通りしちゃ、折角せっかくの判じ物が台無しだ。

大舟はないだろうが、小舟町というのはあるぜ」

「なるほど、荒布橋あらめばしから中ノ橋へかけて、小舟町だ。そこに市兵衛というのがありや、今から直ぐでも踏込んで縛って来る」

「行って見るがいい、そんな事で判りや大手柄だ」

「じゃ、親分、お品さん」

ガラッ八の八五郎はサッと飛出しました。ノッソリしているようでも、御用となると、この男には羽が生えます。

平次はお品の書いた判じ物のような文字を、凝^じつと見詰めました。大舟町市兵衛が判ったにしても、この後の五文字『百四十四夜』は何の事やら少しも判りません。

お品は次の間へ行つて、お静と女らしい細^{こまじま}々とした話に耽^{ふけ}っておりしました。

三

ガラッ八の八五郎は、その日の夕方へとへとになって帰つて来ました。

「小舟町には市兵衛も二兵衛もありやしません。ああ草臥^{くたび}れた」

「大舟町を小舟町と判じたのが無理かも知れないよ、——飛んだ骨折だったね、お隣から貰^{かしわもち}った柏餅があるから、二つ三つ押し込んで、晩飯の出来るまで待つがいい」

平次はツイ腹の中の親切の地を出して、ガラッ八のためにお茶を淹^いれてやりました。

「有難いね、なるほど今日はお節句だ」

八五郎はあわてた恰好で柏餅へ手をやります。

「どんなに腹が減ったか知らないが、右と左へ柏餅を持って、チャンポンに食う人間はないぜ」

と平次。

「餡^{あん}と味噌^{みそ}との食いわけだ」

「呆れた野郎だ。――柏の葉っぱごと食わないようにしろ」

平次はそう言い捨てて、お品の方へ向き直りました。

「何を考えていたんで？ 親分」

温ぬるい茶をガブリとやって、ガラッ八もその中へ割込みます。

「百四十四夜という文句を考えて居るんだ、どうも解らねえ」

銭形平次も少し持て余し気味の様子です。

「すぐ判りそうなもんじゃありませんか。――お七夜、お十夜、八

十八夜、百もよ夜がよ通いは深草の少将で――」

「馬鹿野郎」

「へッ、うっかり知恵も出せねえ」

柏餅で腹一杯になると、ガラッ八はもうこんな調子でした。

「元旦から百四十四日目というと、五月の二十六日になりますね」

お品は指を折りながら、月の大小を勘定しております。

「そんな事かも知れないが、元日から勘定するのは、暦こよみの上では

珍しいことだ。例えば、八十八夜も二百十日も、節分から勘定す

るのが定法だから――」

「節分は？」

ガラッ八は立上がつて柱暦を覗きました。

「節分は暮だったよ。そいつは今年の暦だ」

「不自由な暦だね」

「節分から百四十四日目は、八十八夜から五十六日目じゃないか、八十八夜は何日だい？」

「だからあつしが八十八夜と言ったじゃありませんか」

ガラッ八の鼻は少しばかり蠢うごめきます。

「深草の少将だけは余計だよ。――無駄を茹かって、八十八夜を捜

しな」

「三月の七日」

「お品さん、算盤そろばんを頼みますよ。三月は小の月だから八十八に十二足す。四月も小でそれに二十九足す——といくら」

「百三十九になりますよ」

お品の華奢きゃしゃな指は、思いの外器用に、算盤の珠の上へパチリパチリと動きました。

「あッ、——節分から百四十四日目というと五月の五日だ」

「今日？」

ガラッ八も思わず息を吞みます。

「百四十四日と書かずに、百四十四夜と書いたのは、多分今夜のことだろう」

平次の声も緊張しました。

「何処でしょう」

とお品。

「それが判りゃ」

三人は顔を見合わせるばかりです。

「少し考えよう。——たった一と晩で、五千両の金と、御用金泥棒が二人飛ぶかも知れない」

平次は深々と腕こまめを拱きます。こんな時こそ、江戸開府以来の素晴らしい知恵を、手一杯に働かせるところでしょう。

「親分、本当に小舟町でしょうか」
とガラッ八。

「まず間違いはあるまい。この曲者は、恐ろしく洒落っ気がある」
「その小舟町に、赤井市兵衛がいるのも確かでしょうね」

お品もたまり兼ねて口を出しました。

「それも間違いはあるまい。五千両の金がありや、人の物でも唯取ろうという心掛の人間は、山里に隠れて三年の間鹿や猿と一緒に暮す気にはなるまい。金を隠すにも、贅^{ぜい}を尽すにも、江戸は一番いいところだ」

「――」

「八」

「へエ――」

「下つ引を五六人狩り集めて、小舟町中を当って見てくれ。暮しの良い浪人者はいないか、町人でも武家出の西国訛^{なまり}のある人間はないか、二三年前から住みついて、金があり余って困るようなのではないか、仁兵衛とか三郎兵衛という名で、黒河とか、青山とか、兎^とに角^{かく}、色に因縁^{ゆかり}のある苗字か屋号を持っているのはいないか、――これだけの事を、一刻^{とき}のうちに捜らせてくれ。俺とお品さんは、小舟町の自身番に行って待っている」

「大丈夫でしょうか、親分。そんな判じ物見たいな事で」
ガラッ八には、何かしら不安がありました。

「洒落っ気は人間の癖だ、この狙^{ねら}いが外^{はず}れたら、俺は十手捕縄を返上するよ」

平次の強大な自信に追っ立てられて、ガラッ八は晩飯を食うのも忘れて飛出してしまいました。

「親分」

お品はその理智的な顔を挙げました。

「大丈夫だ、お品さん。大舟町だの、百四十四夜だのと洒落のめす奴は、青山仁兵衛とか何とかいって、小舟町にぬくぬくと住ん

でいるに違いない」

平次は自分に言い聞かせて自信を固める^{かた}ように、もう一度こうくり返します。

四

八五郎の鼻の良さは、一刻経たないうちに、要領を得てしまいました。

「親分、判った」

自身番へ飛込んで来たのは酉刻^{むつ}少し前。

「大きな声だぜ、——そつと言ってくれ、町内へ触^{ふれ}を廻すには早え」

平次はそう言いながらも、この報告をどんなに待ち兼ねたことでしょう。

「白石屋半兵衛——こいつに間違いはねえ」

「なるほど、それが赤井市兵衛の変名だったのかい」

「三年前にこの町内へ来て、米、油問屋の古い暖簾^{のれん}を居拔^{いぬき}のまま買ったんだ。その代金が七百五十両」

「成程」

「武家出だそうで、商売は番頭任せ。五十五六のまだ達者な身体を持ち扱って、好き放題に日を暮している。白石屋というから、奥州の白石に縁があるのかと思ったら、それは先代から買った暖簾名で、当人は心持西国訛^{なまり}があるというのも面白いじゃありませんか。ね、親分、こいつが曲者でなかった日にゃ、あつしも十手捕縄返上だ」

八五郎はすっかり意気込みます。

「つまらねえものを流行^{はや}らかすなよ、——ところで女房子は？」

「女房はお吉といって三十七八、こいつは商売人上がりらしい代^{しろ}物だ。おしゃれでおしゃべりで、お先っ走りだが、人間はあんまり伶俐^{りこう}じゃねえ。一年くらい前から来ている姪^{めい}のお雪は十九で、これは品のいい綺麗な娘。番頭の喜助は四十五六の手堅い男、手代の文三郎は店へ来て一年そこそこにしかないが、男っ振も評判も無類だ。外に小僧が二人、下女が二人、店には通いの男が二三人」

「大層な人数じゃないか」

「此方にも五六人手が揃いましたぜ、踏み込んで見ましようか、親分」

「そいつは拙^{ます}いな、判じ物で人を縛るわけには行かねえ」

「それじゃ？」

「手前^{てまえ}と二人だけで乗込んで見よう。明日というわけには行かねえ。お品さんはしばらく此処で待って貰おう」

平次は躊躇^{ちゅうちよ}しませんでした。この上証拠などを揃えていては、どんな手違いになるかもわからない情勢だったのです。

が、白石屋に乗込んで行って驚きました。

中は煮え返るような騒ぎ、四間半間口^{まぐち}の店から、不安と焦躁^{しょうそう}の気がこぼれて居たのです。

「どうした」

いきなり小僧をつかまえて訊くと、

「旦那が死んだんです」

予想もしなかった答です。

「どうして死んだ——何時、何処で？」

「按摩あんまの佐の市さんが帰って、奥で横になって休んだまま、——今しがた文三郎さんが行って見ると——」

小僧はゴクリと固唾かたずを吞みました。

「案内しろ、俺は神田の平次だ」

こんな時は、十手に物を言わせる外はありません。

「へエ——」

ガタガタ顫ふるえる小僧に案内させて、店から奥へ、その間幾人にも逢いましたが、男も女もすっかり逆上ぎやうじやうして、平次が何をしに来たかさえ考えてはいない様子です。

「あれは？」

彼方、此方の押入をあけたり、箆たんす筒を抜いたり、騒ぎの中に家捜しをしている若い男に、平次の注意は向きました。

「文三郎さん」

「——」

平次の顔を見ると、あわてて神妙な様子を見せる手代の文三郎は、この騒がしい空気の中に、とにもかくにも不思議な存在でした。せいぜい二十五六の好い男、少し華奢ではあるが、悪人らしい男ではありません。

「あ、銭形の親分さん」

奥の一と間、——店と土蔵はさに挟はさまれて、一方口の狭い部屋の中に、主人の死体は二三人の驚きと嘆きの中に横たわって居りました。

声をかけたのは番頭の喜助、四十五六のよく肥った、——何となく魯鈍ろどんそうに見えるうちにも、強したたかな駈引を用意しているらし

い男です。

「気の毒なことだね、——急に亡くなつたのかい」

「へエ、——あんまり急で、涙も出ません。へエ——」

「平常から弱かつたのかい」

「飛んでもない、丈夫が自慢の主人で、時々肩が凝るほかには、風邪一つ引いたことのない方でございます」

平次はズイと寄りました。かりそめに敷いた蒲団の上、箱枕と小搔卷だけの転寝の姿のまま、主人の白石屋半兵衛は死んで居たのです。

鬢に少し霜を置いた、見事な恰幅で、面ずれ、竹刀だこを見なくとも、たった一と眼で武家出とわかりますが、それが心持顔を歪めて、さしたる不自然な形の崩れもなく、息が絶えていたのです。

苦悶の跡も、刀槍の傷も、毒物の斑点もないのですから、卒中か心の病の頓死といつても、誰も疑う者はなかつたでしょう。が、これを平凡な死にしてしまつては、『百四十四夜』と今宵を暗示した、不思議な判じ物の意味が判らなくなります。

そのうちに町内の本道（内科医）が来ました。誰が呼んだのかわかりませんが、息の絶えてしまつた者には、耆婆扁鵲も施しようがありません。

「これは卒中だ。何とも致し方がない」

そこそこに立上がる本道の袖を、平次はそつと押えました。

「それでも卒中でしょうか、もう一度診て下さい」

平次は死骸を俯向にして、そのぼんのくぼのあたりを指します。

「あッ、成程」

本道はあわてて眼鏡を取出しました。白石屋半兵衛の首の後、ちようど毛の生際はえぎわの急所に、蚊にさされたほどの、小さい小さい傷があつたのです。

「こいつは人間の命を取るほどの傷じゃないでしょうか」

「いかにも、これは大変だ。――頂門ちやうもんの一針しんとはこのことだ」

「八、この家の者を、一人も外へ出しちゃならねえ、――それから、宵に來た按摩あんまをつれて来てくれ。手荒なことをするな」

「へエ――」

ガラッ八は弾みのついた毬まりのように飛んで行きました。

五

ガラッ八の後姿を見送って、平次はもういちど部屋の中を見廻したのです。

「あの、主人は、若もしや？」

女房のお吉は、自墮落じだらくな顔を引締めて、一生懸命になります。

「お気の毒だが、人手に掛けて死んだよ」

「えッ」

「按摩が帰ってから、誰と誰が此処へ入ったか、判るだろうな」
平次はすぐ大事な問いに取りかかりました。

「お雪さんと――」

お吉は自分の側にいる若い娘を振返ります。

「いつものように、水を持って参りました」

十八か十九か、四方あたりの殺風景さに似ぬ、物優しい娘でした。

「その時主人は生きて居たんだね」

「え、寢息を聞いたような気がします」

「そんなに近く寄ったのかい」

お吉の眼は嫉妬しづとに燃えました。

「でも——」

「このお雪さんというのは、主人の本当の姪めいじゃないんだね」と平次。

「赤の他人ですよ。——元は奉公人だったんです。少し渋皮しぶかわが剥むけているばかりに、物好きな主人が姪とか何とか披露ひろうしましたよ」本人を前に置いて、お吉の舌は深刻に発あはき立てました。

「それから誰が入った」

「番頭も手代も入りました。——その手代の文三郎が、主人が死んでいるのを見付けたんです」

「番頭を呼んでくれ」

平次が言うとお雪は吞込んで部屋の外へ出しましたが、間もなく、番頭の喜助をつれて来ました。

「へエー、親分さん、御用で？」

「先刻お前さんがこの部屋へ入った時、主人は生きて居たのか、死んで居たのか」

「それがよく判りません。——私は部屋の入口から声を掛けたただけで、お傍へ寄ったわけじゃございませんから、お返事がないのを、よく眠っていらつしやるものとばかり思い込んで居りました」

「どんな用事があったんだ」

「今日の帳尻と、荷繰にぐりのことを申上げる心算つもりでございました」

「そいつは毎晩やるのかい」

「毎晩やることにはなっておりますが、晩酌ばんしやくをお過しになると、

ツイ面倒臭くおなりの様子で、へエ」

喜助はお吉の顔を顧みて、場所柄ながら少しばかりにんがりとします。

「お前さん此処に何年居るんだ」

「三年でございます。——でも、大阪に居る時分からの御引立てで、旦那様にお目にかかってから、彼れこれ十年にもなりましようか」

「大阪は何処に居たんだ」

「あの、心斎橋通りに居りました」

「何という家だ。商売は？」

「大阪屋、——油問屋でございました、へエ」

「主人は人手に掛けて死んだに相違ないが、お前には心当りはないかえ」

「それを承^{うけたまわ}つて、ただもうびっくりして居ります。こんな結構な御主人を、怨^{うら}むものなどがあつてよいものでしょうか」

「怨みがないまでも、主人が生きていては困る者があるだろう」

「さア」

喜助はこの問いを持って余した様子でした。

「文三郎に来るように、そう言ってもらいたいが——」

「へエ——」

喜助は解放^{かいほう}された喜びに、よく肥った身体を転がるように部屋から出て行きました。

続いて入って来た手代の文三郎、この店中では一番立派な男ですが、何に興奮したのか、平次に呼び付けられても、挨拶をするでもなく、死骸の側に無造作に坐って、何やら気になるらしく、

後ろの方ばかり振り向いて居るのです。

「先刻何か捜していたようだが、ありや何だい」

平次の問いは少し突っ慥貪けんどんでした。

「何でもありません」

「主人が死んだという晩、家中の押入おしいれを覗くのは穏やかじゃないな」

「――」

文三郎は黙って唇を噛みます。

「いつから此店ここに居るんだ」

「一年ほど前からです」

「この主人を、赤井市兵衛と知ってか」

「えッ」

文三郎は愕然がくぜんとして眼を睜みはりました。平次の言葉が、あまりにも意外だったのです。

「五千両の金は、まだ見付からないのか」

「飛んでもない、親分」

平次の言葉の効果こうかは、全く見事というの外はありません。理智的に見えた文三郎が、すっかり度胆を抜かれて、急にソワソワし始めましたが、平次の問いに対しては、まだ何と答えたものか、思案も定まらない様子です。

六

間もなくガラッ八は若い按摩あんまを一人つれて来ました。この界限を流して歩く、佐の市という二十七八の男、物の黒白位は見える

ようですが、按摩も鍼はりもなかなかの上手じょうずな上、持前の愛嬌のよさが手伝って、旦那衆にも可愛がられて居ります。

「佐の市か」

「銭形の親分さん」

佐の市は声のする方へヒョイとお辞儀をしました。

「お前が帰る時、白石屋の主人はたしかに生きて居たかい」

「それはもう、親分さん。変ったことがあれば、黙って帰るような事はいたしません。――揉もんでいるうちに、斃いびきをかき始めた様子だから、搔か巻まきをお掛けして、そつと帰りました」

「鍼はりは？」

「持つては居りますが、白石屋さんは鍼をお嫌いで、一度も打つたことはありません」

「お前の鍼箱はりばこを見せてくれ。鍼が足りなくなつて居るようなことがあるかも知れない」

「へエ――」

平次の言葉の意味を掬くみ取り兼ねながらも、佐の市は懷中の鍼箱を取り出しました。

一番から十番まで、一寸五分位から、五六寸のまで、枕に並べた定法の鍼の数を、不自由な眼と手て搜さぐりとで辛からくも読むと、

「一本も無くなつては居ません、親分」

佐の市は昂然として首をあげました。

「ところが、白石屋の主人は、その鍼を打たれて死んだのだよ」「えッ、――そんな事はありません。何処へ、どんな鍼を打ちました。手さぐりで、私に教えて下さい」

「此処だよ」

平次は佐の市の手を取って、死骸の頸筋の鍼痕はりあとを探さがせました。「これですか、親分。——これは、十四経和語抄きようわごしょうにもない、六百五十七穴の外の、禁断の鍼ですよ、親分」

「——」

「こんな鍼を打たれちゃ、一とたまりもありません。——多分物も言わずに死んだことでしょう」

「佐の市、——お前は、この家の誰かに、その急所を洩しはしなかったか」

平次はいよいよ最後の問いまで辿たどりつきました。お吉も、お雪も、ガラッ八も、思わず固唾かたずを呑んで、按摩の唇の動きように見入ります。

「ツイ冗談ともなく、話したことがあります」

「誰へだ」

「亡くなった白石屋の旦那様に、——十日ばかり前のことでした」
「外にはないか」

「聞いていた方があったかも知れません。が、この眼では」
「見当位はつくだろう」

「絹摺きぬずれの音と、柔かい息づかいを聞いたように思いますが——」
佐の市の言葉は暗示あんじてき的です。絹物を着て居る、柔かい息づかいの人間というと、女房のお吉と姪のお雪の外にはありません。

「話は違うが、お前の眼はいつ頃から悪くなったんだ」
「五つの時からですよ、親分」

佐の市の言葉には、諦め切れない悲しみがあります。

「生れは？」

「御当所でございます」

「師匠は？」

「沢田検校様」
けんぎょう

少しの疑いありません。

「有難う、お蔭でいろいろの事が判った。もう帰ってもいい——
八、誰かに送らせてやるがいいぜ」

平次は佐の市を送り出してホッと息づきました。

七

白石屋の四方は下っ引を動員して、隙間もなく見張らせましたが、そのためか、今晚来なければならぬ筈の、稲妻小僧いなずまの六は、何時まで経っても姿を見せません。

「若しや？」

平次の胸には、大きな疑問が浮びました。稲妻小僧の六という曲者は誰かの姿を借りて、この包囲陣の中——白石屋の家の者として、澄して居るのかも判らないと思いついたのです。

平次は八五郎を呼んで、二つ三つの用事を言い付けました。

「誰でも構わない、一人は勘定方の御係りへ行つて、三年前宇津谷峠で斬られた、中根鉄太郎という人の身寄りの者の居るところを聞いてくれ。皆な揃つて居るならいいが、弟なりせがれなり、妹なり娘なりが、一人でも欠かけて居るなら、その行先から、人相などをよく聞いて来るがいい」

「へエ——」

「もう一人は、町奉行へ行つて、大阪の事をよく知って居る人に、心斎橋通りの問屋で、大阪屋というのがあるかないか聞いてくれ」

「へエ——」

「それからもう一人は、灸^{きゅう}や鍼^{はり}の道具を売る店を捜して、近頃素人に一番の鍼を売らなかつたか訊いてくれ。なアに、日本橋から江戸橋の近所だけでたくさんだ。それで判らなかつたら、江戸中を捜さなきゃなるまいが、大方一軒か二軒で埒^{らち}があくだろうよ」

「へエ——」

「もう一人、石原の利助兄哥のところへ行つて、駿河^{するが}から持つて来た煙草入を借りて来てくれ。——それだけ揃えば、夜の明けないうちに何も彼^かも解るよ。八五郎とお品さんは、家の中へ入つて、俺の手伝いをして貰おうか」

平次の指図は恐ろしく行届きますが、それが、家中の者に筒抜けに聞えるような大きな声です。

下っ引は八方に散つて、家の中はしばらく空っぽになりました。

「親分」

「何だ、八」

「あの文三郎という生っ白い手代は、まだ家の中を嗅ぎ廻つて居ますよ」

「抛^ほつて置け」

「あの野郎が稲妻小僧じゃありませんか。夜の明けないうちに、五千両の金を捜し出して、持つて逃げ出そうという魂胆^{こんたん}でしょう」
「抛つて置くがいい。あのヒヨロヒヨロした男に、五千両の小判が持てるものか」

平次は一向驚く様子もありません。ガラッ八は諦めた様子で店の方へ引返します。

「親分」

今度はお品でした。

「変ったことでもあるのかい、お品さん」

「何にもなくて困るんです」

「二人の女は？」

「睨み合ったまんまですよ」

「この家に五千両の金が隠してある——と仄めかして見るがいい」

「そんな事を言ってもいいでしょうか」

「悪者は最初から知ってる。——慾のない人間には教えても一向差支えはない」

「じゃ、そうやってみますワ」

平次の自信に動かされて、お品は元の部屋に引返しました。が、其処には、お吉も、お雪も居ず、半兵衛の死骸だけが、まも護る者もなく、冷たく横よこたわって居るだけでした。

「た、大変ッ」

庭の方から、消魂けしたましい声。

お品と平次と、廊下でハタと顔を合せて、無言のまま庭に飛降りると、ガラッ八の八五郎が、庭の灯溜りを指さして、もういちど爆発しそうな声を、一生懸命に噛み殺しております。

「何だ、八？」

と平次。

「これを見て下さい」

指さしたのは、中位な鯉こいのぼり幟を半分ほどおろした下、幟の竹竿たけざおを立てた、嚴重な二本の石柱のあたりに、紅に染んで一人の男が蹲うずくまって居るではありませんか。

引起して見ると、番頭の喜助、もう息も絶えて、呼び生かしよ

うもなかったのです。

灯あかりを呼んで調べると、頸筋くびすじを後ろから引切った見事な深傷ふかで、多分、声も立てずに死んだことでしょう。

八

「親分」

「何だ、八」

「あの野郎を縛って構わないでしような」

「誰だい」

「稲妻小僧の六」

「見当が付いたのか」

「手代の文三郎ですよ。あれが稲妻小僧でなかった日にや、あつしは——」

「十手捕縄の返上は少し気が早いぜ、もう少し待ちな。——証拠が揃わない」

平次は落着き払います。もう暁あけぢか近いでしょう。初夏といっても、涼しい風が寝不足の肌を引締めて、妙にゾクゾクさせます。

「家の中を嗅ぎ廻って居るじゃありませんか。証拠なんか要るものですか、縛って引叩けば、手もなく白状しますよ」

「馬鹿っ、そんな世間並な気になるから、何時まで経っても見当が外れるんだ。岡っ引は科とがのないものを縛っちゃ恥だ」

「あの、あの男に科とがはないと言うんで——」

「物の譬たとえだよ」

平次は軽く外そらせて、背を見せます。

「五千両の隠し場所？ 親分」

ガラッ八は追っかけました。

「それも見当が付いたよ」

「本当ですか、親分」

八五郎の声は、親分平次に対する讃嘆に弾みます。

「俺が嘘を吐いたことがあるかい。夜が明けるのを合図に、見事五千両を引出して見せるよ」

「親分、それじゃ大手柄じゃありませんか」

「此上赤井市兵衛と番頭の喜助を殺した奴が見付かりさえすればね」

「それなら、あの文三郎じゃありませんか」

「いや、違う」

「親分」

「自分で殺したなら、あんなに無遠慮に家中を捜し廻るようなことはあるまい」

「それじゃ？」

「もう直ぐ判るよ」

「あのお雪という娘じゃありませんか。主人の部屋へも入って居るし、着物にはほんの少し血が付いて居ましたよ」

「綺麗な顔をしているが、何をやるか判ったものじゃない。叩けば埃の出る身体じゃありませんか」

平次は考え込んでしまいました。

「親分」

「よし、やって見ようか。稲妻小僧の六はこの騒ぎに驚いてしばらくは寄り付くまい。せめて二人殺しの下手人を挙げて、五千両の御用金を勘定方にお返ししよう。来い、八」

「可哀想だが、やりますよ、親分」

手ぐすね引いて、お雪の部屋というのへ向った二人。

「待って下さい」

暗い廊下で、ハタと行手を阻はばまりました。

「誰だい」

「私でございます」

「手代の文三郎さんか、何の用事だ」

平次の言葉は冷たくて厳しい調子でした。

「御主人と番頭さんを殺したのは、この私です。お雪さんなんかじゃございません。私を縛って、何処へでも突出して下さい」

「――」

平次は黙って突立ったまま、遠灯りにすかして激情にふるえる若者の顔を見やりました。

「そして、五千両の御用金は、お願いですから、お雪さんの手から、勘定奉行へ還かえさせて下さい」

文三郎は板敷の上へハタハタと坐りようてって、両掌を合せて居るのでした。

「よしよし、よく言ってくれた。――ところで、主人は何で殺したんだ」

と平次。

「按摩あんまの鍼はりで殺しました」

「その鍼はどこから手に入れて、何処へ隠した」

「番頭の喜助は何んな意趣で殺した」

「どうして殺した」

「ヒ首で殺しました」

「そのヒ首は何処へやった」

「おいおい嘘を吐くなら、もう少し器用に吐くものだよ。——本
当の事を教えてやろう。主人を殺したのは、あの番頭の喜助さ。
五千両の隠し場所を嗅ぎ付けて、急にそれが欲しくなったんだ。
ところが、五千両を隠し場所から取出す段になって、赤井市兵衛
の仲間——多分稲妻小僧の六に見付けられ、その場で敵を討たれ
たんだ。刃物は剃刀さ、ヒ首なんかじゃない」

「平次の明智に、文三郎もガラッ八も圧倒されてしまいました。
「主人を殺した鍼は、あの部屋の壁の中に叩き込んであったよ。
番頭を殺した剃刀は、多分あの幟の竿の割れ目に入って居るだろ
う」

「それから、お雪さんというのは、主人の姪でも何でもない。あ
れは勘定方役人、三年前宇津谷峠で三人の曲者に斬られた、中根
鉄太郎という方のお嬢さん——だ。奉公人に住み込んだが、綺麗
で利発なので、主人の市兵衛が、姪と言ひ触らしたのだろう——
これは間違いない心算だ。勘定方へ行った下っ引が帰って来れ
ば何も彼も判る」

「親分、その通りです。フトした事から白石屋半兵衛が、赤井市兵衛と知って、敵を討つ心算つもりで入り込みました。でも、五千両の御用金を奪い還さない限り、敵を討つても誉ほまれにはならず、父上鉄太郎様の汚名そそを雪がれません。お嬢さんが今日まで我慢していたのは皆そのためでした」

「お前は何だ」

「中根様の用人、青山文三郎」

「そうか」

平次も何やら予想外なものがあつた様子です。若い文三郎の猷身的な働きは、決して愛や情から出発したものばかりではなかったのです。

九

「あッ、危いッ」

文三郎は絶叫しました。振返ると、三四間先の廊下を、女がお雪に追いつがって、髪を掴んで引戻しざま、キラリとヒ首あいくちを振り冠かぶつたのです。蹴飛ばした雨戸の間から、朝の光がパツと射します。

「己れッ」

平次の手からは銭が飛びました。

「あッ」

たじろぐヒ首の女、飛込んだガラッ八は、その後ろからギューと羽搔はがいじめ締にします。

「あッ、気障めづだよ、畜生ッ」

女が身を沈めると、ガラッ八の巨体は縁側にもんどり打ちました。

「御用ッ、神妙にせい」

飛込む平次。

「亭主の敵を討った私に、何が御用だい」

振り冠った乱髪の中から、激怒に引吊るお吉の顔が、朝の光を半面に浴びます。

「稲妻小僧が女と知らなかったばかりに、余計な人間を一人殺させたよ。サア、もう逃しはしないぞ」

と平次。

「馬鹿におしでない」

ヒ首と銭とは、しばらく宙に相打ちました。ちゅう女ながら、稲妻小僧と言われた、恐ろしい軽捷さ、けいしやう暫く平次も持て余したが、やがてヒ首を叩き落すと、キリキリと縛り上げます。

「あ、親分」

木戸を開けて、庭先へ入って来たのは、物音に驚いて飛込んで来たお品とその子分でした。

「お品さん、これが稲妻小僧の六だ。三人組の一人が女とは気が付かなかったよ。赤井市兵衛の白石屋半兵衛は死んでしまったが、この女を突出しただけでも、御奉行所ではお喜びだろう」

「――」

お品は黙ってお吉の稲妻小僧を受取りました。感激に上気した顔に、初夏の朝風が快よく吹きます。

「それから、駿府から持って来た藤太の煙草入を貸して貰おうか。お吉の帯の間には紙入がある筈だ。それと、殺された主人の煙草

入があれば、五千両の唐櫃からびつは開くだろう」

「親分、唐櫃は何処にあるんで」

ガラッ八は狐につままれたようです。

「男の子のない家に樹たてた、鯉職の下にあるのさ。五月五日の晩に仲間を呼んだのは、人目につかずに、これが開けられるからだ」

鯉職こいのまりの竿を持たせた二本の石柱の根を掘ると、一枚石の下から、櫓かしのかなり大きな唐櫃が出て来ました。錆びた金具に、三つの海老錠びじょう、その一つ一つが、藤太と市兵衛の煙草入から出た鍵と、お吉の紙入から出た鍵で開くようになっております。平次の手で蓋ふたをはねると、

「あッ」

中から出たのは、全く手付かずの五千両の小判。折から町並の上に昇った朝日に照らされて、眼もくらむばかり。

「こいつは中根様のお嬢さんの手柄てがらになさるがいい。大急ぎで勘定奉行に運ばせましょう。文三郎さんは、お雪さんと一緒に行つて、何にも言わずに納めて来なさることだ」

「親分」

お雪と文三郎は、顔を挙げることも出来ないほど泣いて居りました。

「八、来い。退屈が吹飛んで腹が減へったろう」

平次はクルリとその激動の情景シーンに背を向けました。後ろからスタスタとついて行くのは、恐ろしく腹の減ったくせに、胸が一杯になっている八五郎です。

「親分」

「何だい」

「好い心持だね」

「滅多に朝起きしないからだよ」

平次の足は次第に早くなります。昨夜一晚寝もやらぬ女房のお静と香ばしい味噌汁が待って居ることを考えたのでしよう。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十四年六月号 文藝春秋社

底本―「錢形平次捕物全集」第五卷 河出書房 昭和三十一年七月十五日初版

編集・発行 錢形俱樂部



銭形倶楽部

<http://www.zenigata.club/>